

## 現況分析における顕著な変化についての説明書(教育/研究)

法人名	国立大学法人神戸大学	学部・研究科等名	国際文化学部
-----	------------	----------	--------

## 1. 分析項目名又は質の向上度の事例名

分析項目Ⅱ 教育内容

## 2. 上記1における顕著な変化の状況及びその理由

## ○顕著な変化のあった観点名:教育課程の編成

本学部の教育目的の更なる達成に向けて、教育内容および教育課程において以下の取り組みを実施した。

- 1) 国際化教育に関しては、英独仏中露に加え、ラテン語、韓国語、スペイン語、イタリア語、タイ語、インドネシア語、チェコ語、モンゴル語、アラビア語、エスペラント語等の諸言語が学べるカリキュラムを用意しているが、多言語に挑戦し文化の多様性を学ぼうとする学生の強い要望に応じて、例えば平成 21 年度は、タイ語の授業を前期に引き続き後期も開講し、語学力のレベルアップを図った。またこうした取組を、交換留学へのサポートとしても機能させることができた。平成 19 年度に始まったチェコのカレル大学との交換留学では、上記チェコ語の履修生から 20 年度に 2 名の学生を派遣し、平成 21 年度に学生交換細則が締結されたタイのタマサート大学にも、上記タイ語の履修生から 2 名を派遣した。さらに留学生との合同授業である英語による演習「国際コミュニケーション演習」は、1 年次配当と 2 年次配当の 2 つのレベルを提供してきたが、平成 21 年度にはそれぞれの履修者数が 30 名を越すニーズの高さを示したことから、さっそく対応を協議し、次年度以降はコマ数を現在の 2 コマから 4 コマに倍増して、少人数演習を可能にする改善策を講じた。同時に、英語による講義も現在の 2 年次配当に加え、1 年次配当を新規に増やして、早い段階からの国際化教育を実施できるよう改善した。その結果、神戸大学全体で実施している卒業時・修了時アンケートの設問 6「英語等の外国語能力について、どのような場面で修得に最も役立ったと思いますか」に対し、「学部専門教育の講義・演習・実験」を選んだ者の割合が、平成 18 年は 16.2% (37 名中 6 名)であったものが、平成 20 年は 28.3% (53 名中 15 名)、平成 21 年は 23.7% (38 名中 9 名)と増加している。
- 2) 平成 17 年の学部改組により、2 学科 11 講座制から 1 学科 4 講座制へと移行し、学生の学習選択の幅をもたせただけでなく、同時に様々な教育課程の改善も行った。学部専門科目では学年ごとに専門性の深化が図れるよう工夫しており、まず 1 年次には 4 講座の概論により各専門分野への導入を行うとともに、高校からの転換教育として少人数(約 12 名)の「基礎ゼミ」により文献の探し方、プレゼンテーションの方法、レポートの書き方などの指導を行い、講座所属が決まった 2 年次前期には入門的な専門演習 A、それ以降の各学期にはより専門性の高い少人数演習の専門演習 B を必修としている。平成 20 年度にはその完成年度を迎えたため、卒業生に「卒業時アンケート」を行い(平成 21 年 1 月実施、回答数 101 名)、教育課程の編成がうまく機能しているかどうかを確認した。アンケートによると、「基礎ゼミ」については 82%が「大学の授業に役立った」と評価しており、専門演習 B については学生の履修した平均単位数が必修単位数(6 単位)のほぼ倍の 11.4 単位にのぼっていることから、学生たちが高い学習意欲をもって幅広い選択肢から演習と講義を組み合わせる複眼的な視点を獲得し、4 年次の卒業研究へと専門テーマを絞っていていることを確認した。同アンケートではまた、国際文化学部で学び卒業することに満足している学生の割合が、86%に達した。

## 現況分析における顕著な変化についての説明書 (教育) 研究

法人名	国立大学法人神戸大学	学部・研究科等名	国際文化学部
-----	------------	----------	--------

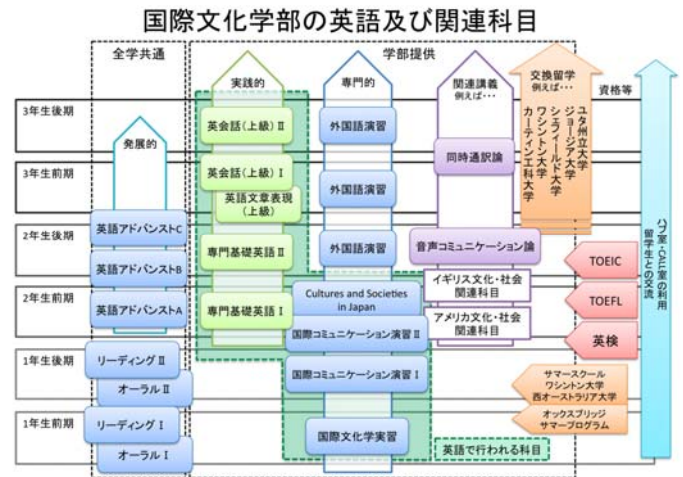
### 1. 分析項目名又は質の向上度の事例名

分析項目Ⅲ 教育方法

### 2. 上記1における顕著な変化の状況及びその理由

#### ○顕著な変化のあった観点名: 授業形態の組合せと学習指導法の工夫

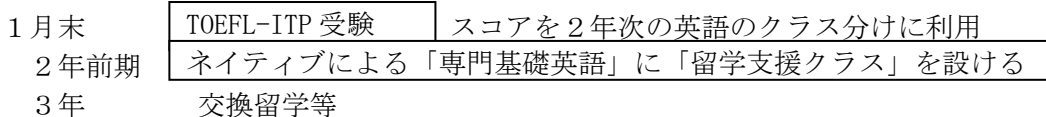
1) 学生の外国語習得に対する要望に応えるために、平成 21 年度に言語別「語学履修チャート」を作成して HP に公開するとともに学生に配布した。外国語関連の授業（※外国語科目の充実については分析項目Ⅱ 教育内容の 1）を参照）に加え、交換留学、語学研修、資格試験、自習施設も含めて学年進行とともに体系的に図示したことにより、履修すべき授業や学習機会の組合せを容易にした。（右図参照：英語の例）



2) 平成 20 年度にインターンシップの単位認定を正式に制度化した。例えば平成 19 年度採択の現代 GP「アートマネジメント教育による都市文化再生」では、芸術関係の現場を実践的に学べる授業に、文化施設でのインターンシップを組み合わせる環境を整備した。なお本現代 GP は平成 21 年度に最終年度を迎えたが、関連する授業科目は平成 22 年度以降も引き続き開講する。

#### ○顕著な変化のあった観点名: 主体的な学習を促す取組

1) 平成 21 年度において、TOEFL を中心とした英語学習を組織的にサポートする体制について検討し、次年度から新たに実施する改善策を講じた。ネイティブによる TOEFL トレーニング授業と連動させ、CALL 教室・教材を利用し TA を活用した自習をサポートするものであり、教員のアドバイザを設け、さらに 1 年末に TOEFL の試験を実施し、そのスコアを 2 年次の英語のクラス分けに利用して、意欲のある学生向けに「留学支援クラス」を設けることとした。これらによって、入学時から 3 年次の留学までの流れが明確になり、学生の主体的学習を促す仕組みが大きく改善された。



2) 平成 20 年度の学舎改修により、留学生と学部生が交流できる場として Intercultural Cafe という学生用ホールを設けた。交換留学生との交流については、学生チューター委員会（約 15 名）を立ち上げ、来日時のような支援やエクスカッションの企画に留まらず、このホールに委員が常駐して留学生のサポートができる体制を組んだ。チューターを務めた学生にアンケートを取ったところ、異文化理解と語学の授業へのモチベーションが高まったと答えた学生が多数を占めた。

## 現況分析における顕著な変化についての説明書(教育/研究)

法人名	国立大学法人神戸大学	学部・研究科等名	国際文化学部
-----	------------	----------	--------

## 1. 分析項目名又は質の向上度の事例名

分析項目Ⅳ 学業の成果

## 2. 上記1における顕著な変化の状況及びその理由

## ○顕著な変化のあった観点名: 学生が身に付けた学力や資質・能力

本学部では、入学時に全員を対象としてTOEFL-ITPを実施して語学学習の動機付けを行うとともに、異文化教育と語学教育に力を注いできたが、留学に必要な語学力を身に付けた学生が増えてきていることを、派遣学生数の増加と認定単位数の増加により確認した。具体的には、法人化された平成16年には20名であった派遣学生数が、平成20、21年度には40名を超すまでに増えている。さらに派遣先大学で取得できた授業単位数が増えるとともに、本学部での認定単位数も飛躍的に増加している。派遣先大学の授業科目名で単位認定を開始した平成18年度以降の認定単位数の推移を比較してみると、平成20、21年度には、単位数がそれぞれ641単位、486単位となり、一人当たりの認定単位数の平均が2桁を超えるまでに延びている(下記資料参照)。また単位認定を行った派遣先大学数も、平成18年度には計10校であったものが、平成20年度には計19校、平成21年度には計17校に増加している。平成20年度にカーティン工科大学に留学した学生は24単位、平成21年度にメリーランド大学に留学した学生は28単位の、異文化理解や文化の多様性についての授業科目等の認定を受けるなどの例もあり、国際的に通用する語学力と専門性が大いにレベルアップしたことが実証された。

(資料)

交換留学の派遣学生数と派遣先大学で取得した授業の認定単位数の推移

年度	平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成21年度
派遣学生数	34	38	41	42
派遣先大学で取得した授業の認定単位数	193	218	641	486
一人当たりの認定単位数	5.7	5.7	15.6	11.6
協定校数	21	28	30	34
単位認定を行った派遣先大学数	10	10	19	17